

## 下又白谷研究

この研究は、昭和37年から昭和40年まで、当クラブが創立30周年を記念して行った山行の中間発表である。

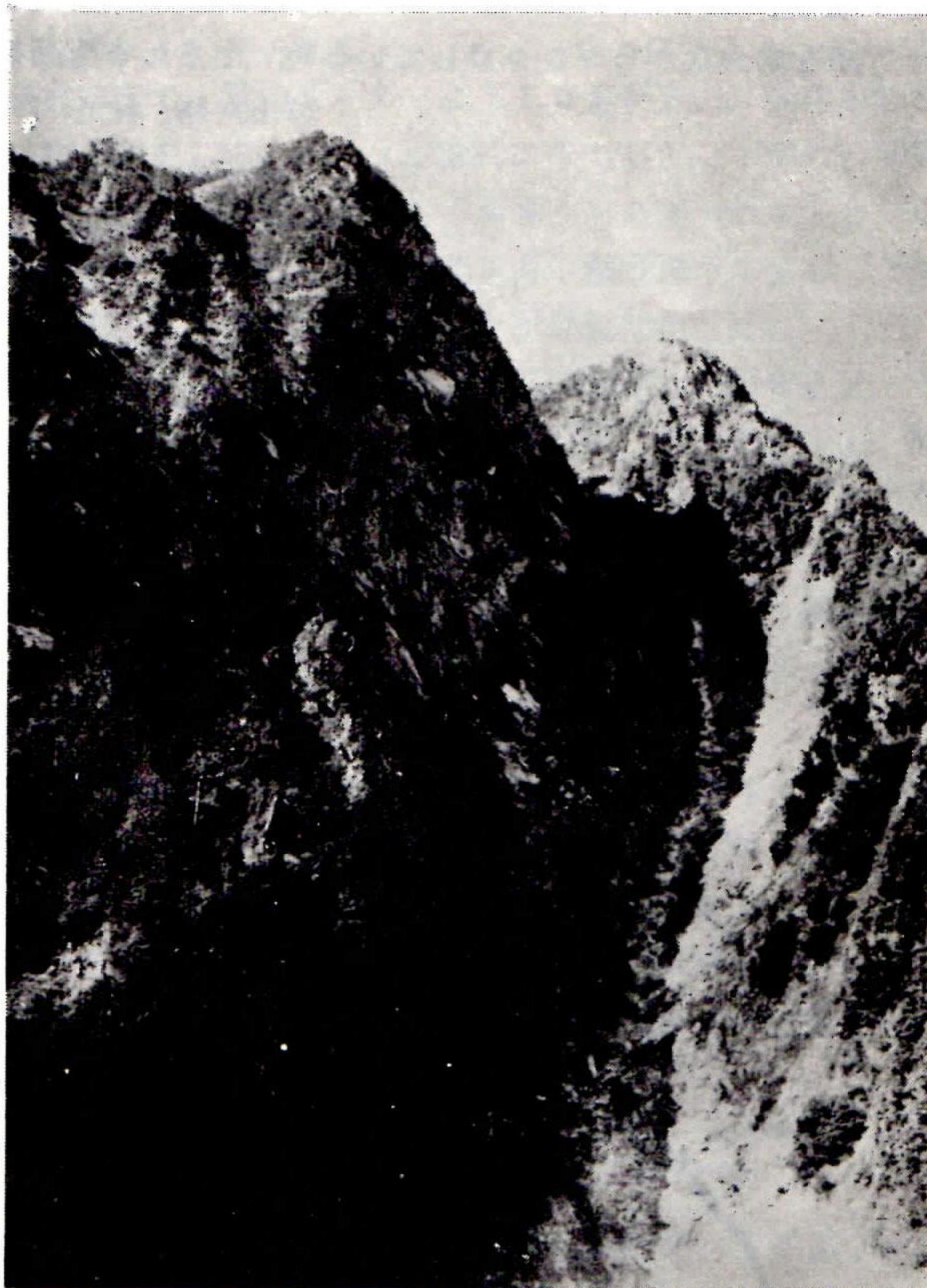
下又白谷は北アルプス前穂高岳、又白谷側にあり、その急峻な事、穂高山群中随一であると思われる。又白谷は前穂高北尾根七峰と前穂高岳から明神岳主峯さらに明神岳東稜にかこまれた一帯の谷を云い、梓川の上流から3本の谷がある。前穂高頂上より東に向って約300メートルの岩壁（東壁）をなし、これは奥又白谷となり梓川に落ちこみ、前穂高A沢の踏替点の“三尺”とその下部に拡がる斜面を源に発する中又白谷がある。

下又白谷は北側を奥又第一尾根と、それに続く茶臼尾根に、南側を明神東稜を境にする広大、急峻な谷であり、この谷はその性格上、上部と下部に分けられ、上部は前穂第一尾根の頭から、明神岳主峯の稜線から東に約200メートル落ちこむボロボロの白い岩壁をなし、明神岳主峯の直下約100メートルの白ザレ

から急に、200メートルの大岩壁帶（下又白谷奥壁と新名称）となり、下又白上部雪渓に落ちこんでいる。下又白奥壁は巾が約400メートル、岩質は風化して赤褐色、又は白色を呈している部分と、奥又白に見られる様なかたい快適な岩と半々にミックスされた落石の多い危険な壁である。

下部の壁は上部とは対象的に、岩質においても形状にしても、壁というより巨大な滝の群れであり、それはだいたい4つの部分に分けられ、高度差約400メートルの大障壁となっている。岩はその膨大な水量と雪崩の為テラテラに磨れた凹凸の少ないスラブで非常に硬く滑らかである。

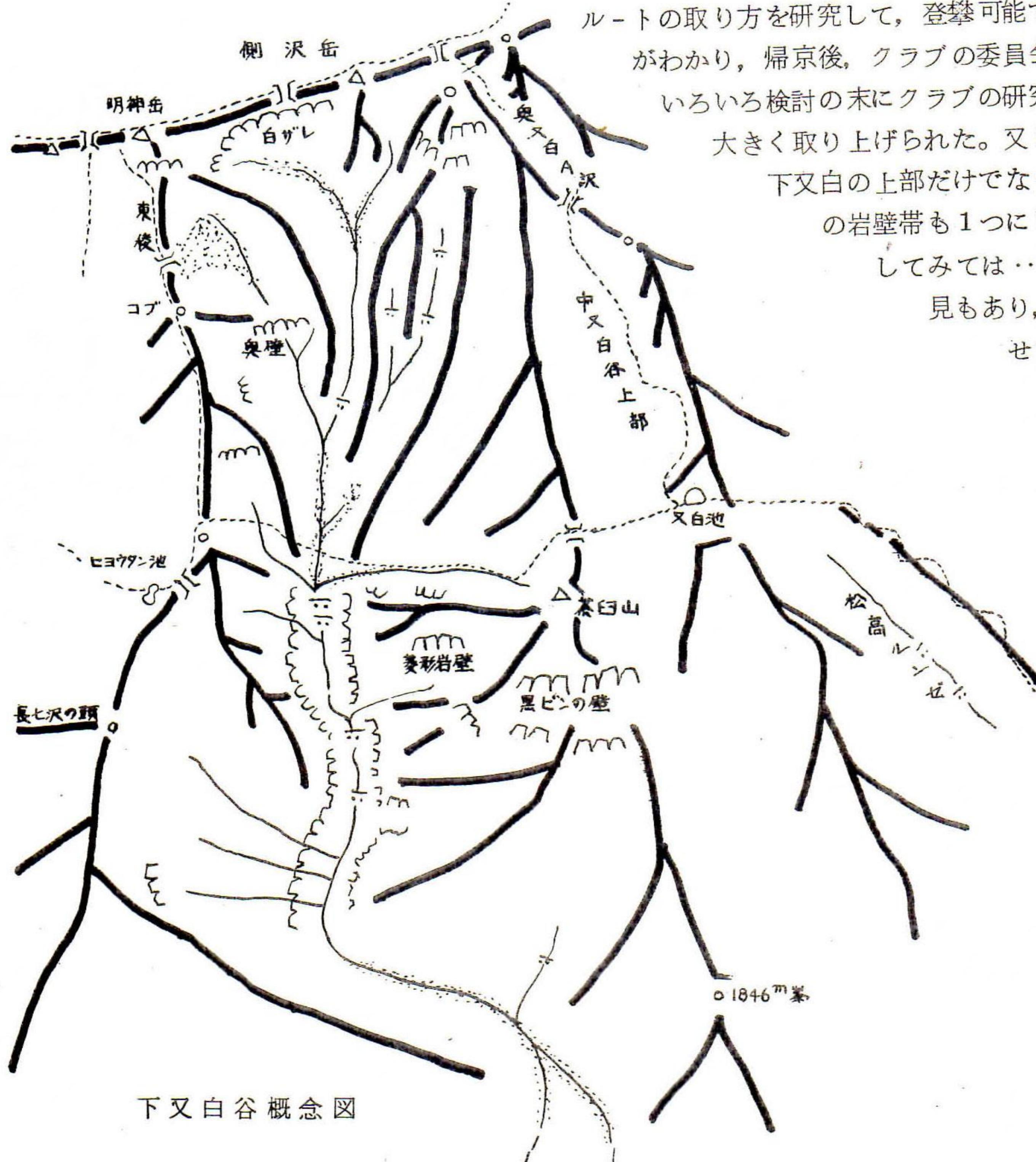
これらの岩壁は今まで登山者の挑戦を完全に拒否し、下部においては見る事も出来ずに、どこにどのような滝があると云う事さえ明らかでなかった。したがってこの登攀史は皆無である訳であるが、これらの滝群が多量の積雪により埋り、アイゼンで登るという登攀は可能であり、1933年慈大パーティにより登攀され、又秋山の話によると年月は不明であるが、新村正一氏も積雪期の登攀を単独で行っているとの事である。



茶臼菱形岩壁

又岩稜会が1949年に左岸のブッシュ帯を下降している。しかしこの未知の岩壁を無雪期、登攀を試みたのは我々が最初であり、穂高岳の中でただ1つ残された最後の岩であると云う事が出来る。

私達がこの壁を登攀の対象として考える様になつたのは、昭和36年、奥又白の山行の時、10日間の予定で奥又白の池に入ったのであるが、毎日毎日雨ばかり降り、登れたのは北尾根のみ、他はテントで酒を飲みながらゴロゴロしている時、たまたま穂高の未登攀の壁の話題が出て、あれこれ話が出た時、秋山の話で「今までぜんぜん登攀の対象にならなかつた壁がある。」と云う事を聞き、雨の中をぞろぞろと茶臼の頂上まで行って、ガスの中に見え隠れする、どす黒い陰惨な問題の壁（下又白谷奥壁）を驚きの眼指しで見とれた。その時の山行で壁の長さ、ルートの取り方を研究して、登攀可能である事がわかり、帰京後、クラブの委員会で発表いろいろ検討の末にクラブの研究目標に大きく取り上げられた。又この時、下又白の上部だけでなく、下部の岩壁帶も1つにして研究してみては…との意見もあり、上下合せて1つの



下又白谷概念図

山田作図

研究目標とし、約5年間でできる様に計画した。

#### <記録>

○37年8月 秋山・添野が又白池に入り、本格的な準備、登攀の偵察を行い、まる2日間かけて、茶臼の頭でプリズムをのぞきながらルートファンディングを行う。翌日から登攀を行う予定であったが、思わぬ事故に合い、よぎなく下山した。

○38年8月 部員合宿を下又白の研究に当て、秋山リーダー以下10名が入山、登攀を始めたが、天気が悪く、又大きな落石もあり、計画を変更して、ベースを徳沢にうつして、下部の岩壁帯の偵察を行う。しかし最初の滝は約60メートル程あり、約20メートルをハーケン・ボルトをたよりに登ったが、ウッドペグの必要にせまられ、泣き泣き下山した。同年9月 添野以下4名で、下部岩壁帯に入山、ウッドペグを持参したが、悪天候の為1週間ほどねばったが登れなかった。

○39年8月 松坂以下4名が、又白池にベースを作り、上部（下又白奥壁）を約80メートル、中央部にある人面岩まで登り（茶臼から見ると、人間の顔の形をしている。）、落石の為下山、徳沢にベースをうつし、下部の滝をねらったが、雪が多くシェルンドが大きく、壁に取り付けずやむなく下山した。

○40年8月 夏の部員合宿を下又白登攀に当て、添野リーダー以下7名が参加。上部奥壁を初登攀。下部の第1の滝を登攀し、ブッシュづたいの藪尾根（山巡査と新名称）を登り、ヒョウタン池に抜ける。

以上がこの4年間の山行であるが、その成果として、第1に奥壁の初登攀、第2に今まで人間が見る事が出来なかつた下又白谷の全貌が明らかとなり、（まだ不明の部分も若干あるが）特に、茶臼菱形大岩壁・菱形右方ルンゼの発見もあり、第1次研究としては、非常に成功したと思う。

今後続いて下又白の研究を行うのであるが、特に下部滝群については、その登攀の可能性の問題、茶臼の岩壁帯の研究もあり、非常に興味のある谷で、今後3年ないしは5年位の年月が必要であると思われる。

#### 「下又白谷奥壁」

壁の長さ400メートル、巾400メートル、傾斜約80度（部分的に大小のハングあり），下降に都合の良いルンゼが右方に有り壁の上部の平な所（野球場と呼んでいる）に抜けられる。左の部分は白くボロボロで、ここは登攀不可能。中央部も落石が多く、畳1枚位の岩がはげる事もある。

#### 「下又白谷下部」

全体で高度差約400メートルで、だいたい4つの滝群からなり、下から、第1の滝は約60メートル、傾斜80度、滝から左に高さ100メートル、巾100メートルの壁があり、我々はその中央部を登攀した。第2の滝は高さ80メートル、傾斜約80度、両岸のスラブは高さ約100メートルで、オーバーハングの1枚岩からなり、登攀不可能の様に思われる。第3の滝群は、約30メートル位の滝が垂直に2つ重っており、どの滝も登る事はなかなかむつかしいと思う。第4の滝は約100メートルの傾斜の比較的なだらかな滝があって、これは登攀可能と思われる。又滝群と滝群との間は雪渓がある、この登りも困難ではないかと思われる。

#### 「茶臼菱形岩壁」

これは一大発見でこの様な大岩壁は日本中どこにもないかと思われる様なみごとさで、谷川岳の

衝立岩を2つ重ねたみたいな感じであり、今まで全く気付かなかった。全体に菱形をしており、頂上は茶臼の頭から南に少しそよった所で、高差300メートル、巾200メートル、傾斜は80度、途中にテラスは1ヶ所もなく、スラブ、オーバーハングの連続で登るとすれば、非常に困難な登攀となるだろう。

### 「菱形右方ルンゼ」

菱形岩壁の下部から右にのびているルンゼで、丁度中間程から左に曲り、最後100メートル位はスラブになり茶臼の頭に抜けている。ルンゼの長さ500メートル、傾斜は60~70度、途中に大小のテラスも有り、なかなかの快適な登攀を楽しませる様である。しかし、ザイルピッチが20~30位かかりそうなので、中又白谷を長くした様なルンゼで、登攀には相当の時間がかかりそうである。

## 下又白谷奥壁初登攀

196<sup>5</sup><sub>4</sub>年8月3日の記録

パ - ティ	檜	山	季	樹
	山	田	裕	紀
サポ - ト(山)	深	沢	敏	夫
	高	木	チエ	子

数年来クラブの目標であった下又白谷の奥壁を、昨年のルート工作と偵察、そして今回の深沢さん等のサポートのおかげで、トレースすることが出来た。この壁の登攀を、一番深く考え研究していた松坂さんの出席が得られなかった事が残念であった。

30周年の記念山行の後に、奥又白の池に集った僕等は、2日には昨年トレースした地点まで8ミリのフィックスロープをセットし終え、登攀の準備は万事ととのっていた。昨年の試登のルートは壁の基部にある3メートル程のハングした青白い壁の右端のピナクルテラスから、バンドを左に40メートルほどトラバースし、カンテを20メートル直上したテラスまでだった。そのテラスからこの壁の特徴である人面のハングは手のとどく位の位置にあった。昨年はその地点まで大分苦労したのに比して、今回の登攀は、壁の特徴をある程度掘めたので、楽に攀る事が出来た。ルート工作終了後は、2回のアップザイレンと20メートルのトラバースで基部に立てた。ことに2回目のアップザイレンは、3メートル程壁から身体が外に出る空中懸垂で、非常に快適であった。

3日。僕等4人は、昨年よりずっと雪の多い、急な雪渓から壁の基部に立った。今日こそ完登出来るかもしれないという気持で、登攀用具を身に着ける。ハーケン・カラビナ・アブミ……にわかれに身体が重くなり、自由をうばわれてゆく感じがする。用具も充分だし、パートナーも僕の古くから

の仲間なので、今日は落ち着いて取付く事が出来る。リーダーの深沢さんから注意を受けて、すぐに取付きに向った。通いなれたピナクルテラスから、昨日の終了点であるテラスに急いだ。大青白ハング上の草付テラスからは、60メートルのフィックスロープがセットされているので、容易に気持ち良く登る事が出来た。けれどもザック無しでも肩にくいこむ三ツ道具の重さには閉口した。

ここから先は未知の壁だった。昨年はこの少し先の人面まで行っただけなのだから。不安と空威張りの様なファイトが、身体中をかけめぐる。それで不安を払いのけようと、僕は先を急いだ。檜山の到着とともに出発した。5メートル程上のバンドに登り、二段のバンドの上段に登った。その時にアイスハーケンを打ち込んだが、僕の愛用していた松坂さんから貰ったハンマーが脆くも折れて、頭部が、壁の基部にせり上っている雪渓まで、乾いた音をたてて落ちて行ってしまった。不安な気持になる……。人面のハングに頭をおさえられる格好で、左へ20メートル程トラバースし、急な草付を登って灌木のテラスに立った。ザイルが岩をこするだけで岩が落ちるほど脆いピッチだった。檜山が登ってきて後壁に取付いてはじめての休憩を持った。この付近はハングに頭をおさえられているとはいえ、草付と灌木に囲まれていて、近郊のゲレンデにでもいる気軽さを与えてくれる。予定通りガリーにルートを取る事にして、昼食前に偵察とルート工作に出かけた。基部付近から見ると、このガリーは簡単に登れる完全なガリーだが、取付いてみると、一寸した凹角で中に3段の小ハングが連続していた。ハーケンとボルトを打込み、先の見通しをつけた。

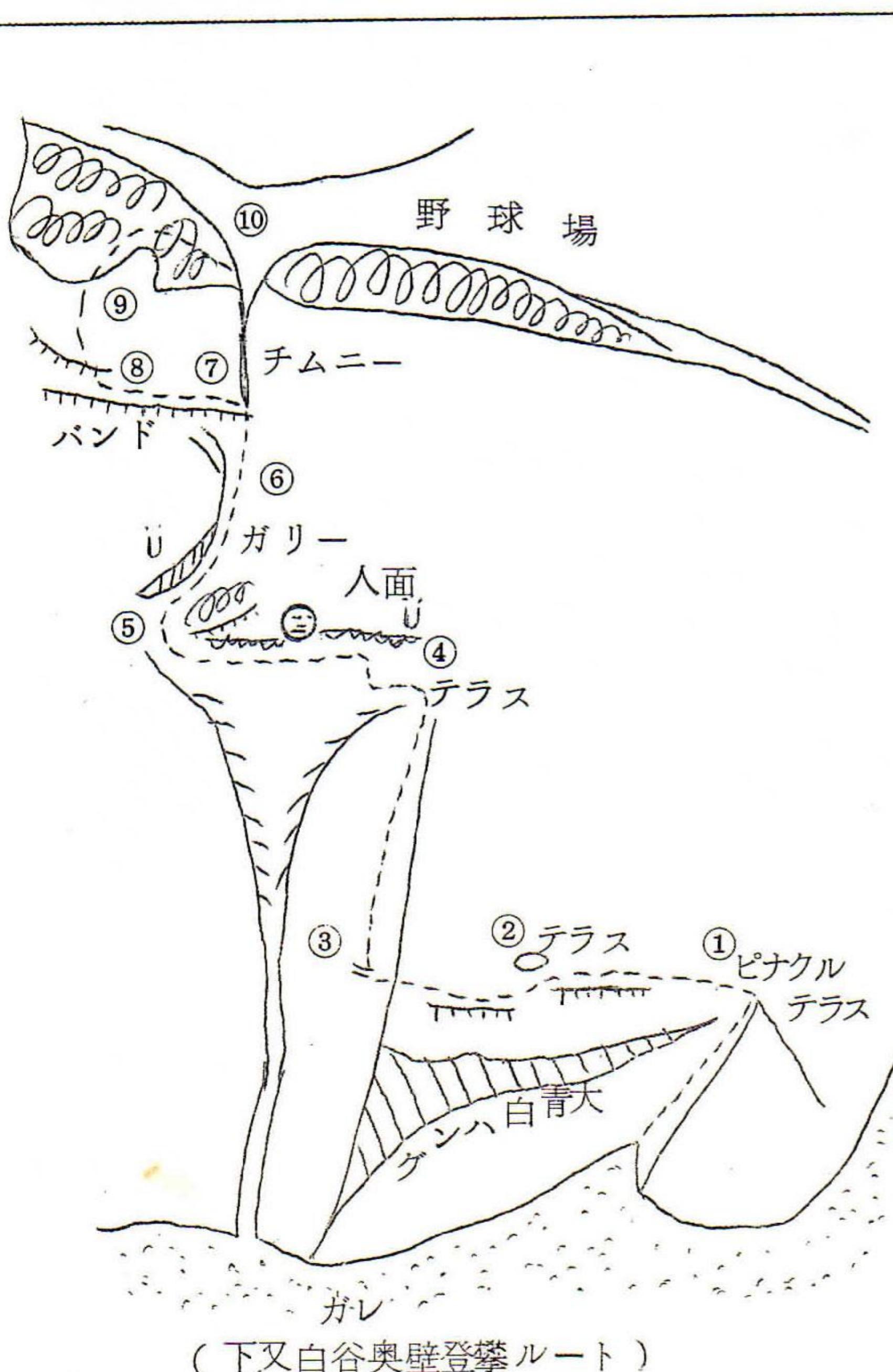
昼食の固いパンと少量のジャム、水で腹を満たして、ハングの乗越しにかかった。先程のルート工作中にアイスハーケン1本を打ちたし、不安定な灌木を利用して、案外簡単に乗越す事が出来た。上部は比較的岩の安定した軟傾斜になっていたが、そこまでの6メートル程は、頭上のハングをよけて、右側の垂直に近い草付を登らねばならない。ザイルシュリングを灌木にセットし、ハンマーとアイスハーケンを両手に持って草付を登り、軟傾斜のガリーに立つ事が出来た。水に洗われた岩肌は、この岩場で初めて安定したクライムを楽しませてくれた。最後のチムニーの下に立った僕等は、あと2ピッチでこの壁の完登を確信した。しかし予定のルートであるチムニーは、チムニーにしては幅が広すぎ、中には不安定なハングした岩がつまっているので、登攀出来ずと考え、左側よりエスケープする事にした。安定した草付のバンドを左にトラバースし、なるべくチムニーよりのルートを作ろうと2・3のルートを考え、アタックしたけれど、いずれも失敗してしまった。この壁はある程度緩い傾斜だが



写真中央にトップ

逆層であった。とりわけ最後にルートとした場所は1本のリスもないスラブと、その上のハングしたスラブにはばまれ、せっかく2つのハングを登りスラブに着いたのに、下らなければならなかった。あれこれと2時間近い時間を無駄にしてしまったので、残念だけれども、左上の灌木帯にエスケープする事にした。灌木のあるハングを登り、バンドをトラバースして灌木帯に突入した。灌木帯といつても、部分的に岳権が生えた70度位の斜度をもつ草付だった。80メートル程直上すると、僕等が「野球場」と呼ぶ、幅が30メートル程あるバンドに立てた。ここからの壁の上は、ただのガレ場となって明神岳直下に突き上げている。僕等の登攀は事実上終った。沢身により立ち、身体中についた金物をほうり出して、水筒の水を飲みほした。「僕等で完登したんだね。」場遅れの握手と一緒に、これからもこの下又白を研究しようという約束をかわした。徳沢のキャンプ場から上の煙をながめながら休憩をしていると、サポートの深沢さん、高木さんからコールがかかる。もう夕暮だった。完登した喜びを胸に、重い腰を上げた。

(山田裕紀 記)



#### ルート概念

- ① 取付ピナクルテラス
- ① - ② 20m バンド・トラバース
- ② 草付3人用テラス
- ② - ③ 20m バンド・トラバース
- ③ - ④ 20m フェース
- ④ 2人用テラス
- ④ - ⑤ 40m バンド・トラバース
- ⑤ 灌木大テラス
- ⑤ - ⑥ 30m 凹角からスラブ
- ⑥ チムニー下大テラス
- ⑥ - ⑦ 20m バンド・トラバース
- ⑦ - ⑧ 20m バンド・トラバース
- ⑧ - ⑨ 40m バンドから灌木帯
- ⑨ - ⑩ 80m 灌木帯
- ⑩ 野球場

#### TIME

- |       |                            |
|-------|----------------------------|
| ① 取付  | 9:35                       |
| ④のテラス | 10:05                      |
| ⑤のテラス | 11:05～12:20<br>(途中ルート工作する) |
| ⑩ 終了点 | 16:30                      |

## 下又白谷下部岩壁

日本各地に悲惨な冷害を及ぼした今年も、僕等にとってはこの上もなく幸運であった。

今まで、幾度となく繰り返されたアタックも、圧倒的なハングと、深いシュルンドに悩まされて来た。しかし多雪な今夏は、その悩みを解決するのに充分であった。

8月7日

奥又から昨日、ベースを徳沢に移したが、今年の徳沢は何と寒い事であろう。

入山して来た添野さんと、午後より偵察がてら谷に入る。10日より合宿があるので、我々に与えられた時間は3日間である。

照りつける陽の下の広いゴーロの行軍は楽ではない。やがて雪渓が現われた。谷が大きく右へ廻り込むと、威圧的な岩壁に囲まれたF1の落口への広大な雪渓がのびていた。例年の取り付点はおろか、その開拓されつつあったルートもはるか雪の下にある。

落口付近は、幅5米もあるシュルンドになっており、岩へ移るのは困難である。落口の左壁のスラブに、1ヶ所、岩へ移れそうな個所があるので、そこを取り付き点に選ぶ。

私達は、そこから落口の左上にのびている岩稜の上のテラスに出て、未知の谷を偵察しようと企てた。それには左壁の中央部を100米程登らなければならなかった。

雪崩に洗われていない、風化した花崗岩は、フリクションは効くが、ボルトは効かないと言った状態で、岩質そのものがもろい様であった。

スラブを5米程登り、小さなレッジに出る。そこから右上するクラックを直上して、落口と同高度の、かなり広いテラスについた。

今日は、これ以上は無理として、明日の為にFixをして下って来た。

久しぶりの御馳走に舌づみを打ちながら楽しい宴であった。

8月8日

朝の陽差しは、快いものである。呼吸をはずませて雪渓を登ってゆく。両岸の白い花崗岩が、陽に映えて美しく輝やいている。

取付きで一服した後、不用の荷をデポして登攀を開始する。

第1ピッチは昨日のFixのおかげで楽に大きなテラスに着いてしまった。上部は、草付き混りの所が、高さ40m程広がり、高さ10m、幅30mのスラブ帯にさえぎられ、その上は、ことごとくハングして灌木帯に到っている。

ルートは正面を登る以外、考えられなかった。比較的ホールド、スタンス共にあり、楽しそうであった。テラス上端を水平に走るバンドを5m程右へゆき、左上するバンド状の岩に移って、テラス正面のクラックに入る。クラックと云ってもV字状で、からうじて足が止まる程度である。クラックを抜け、やゝ傾斜がなるくなつたが、今までより岩が細かく、左上にあるテラスまで、かなりの時間を費してしまった。

上部のルート選択について、なるべくハング帯をさけようと云う事で、灌木テラスの直上の垂直に近い、灌木のガリーを登ろうとした。トップが悪戦苦闘、投げ綱やザイル・シューリング等を使って登り切ったが、その上は何一つないテラテラスラブに行手をはばまれてしまった。仕方なく下って來た

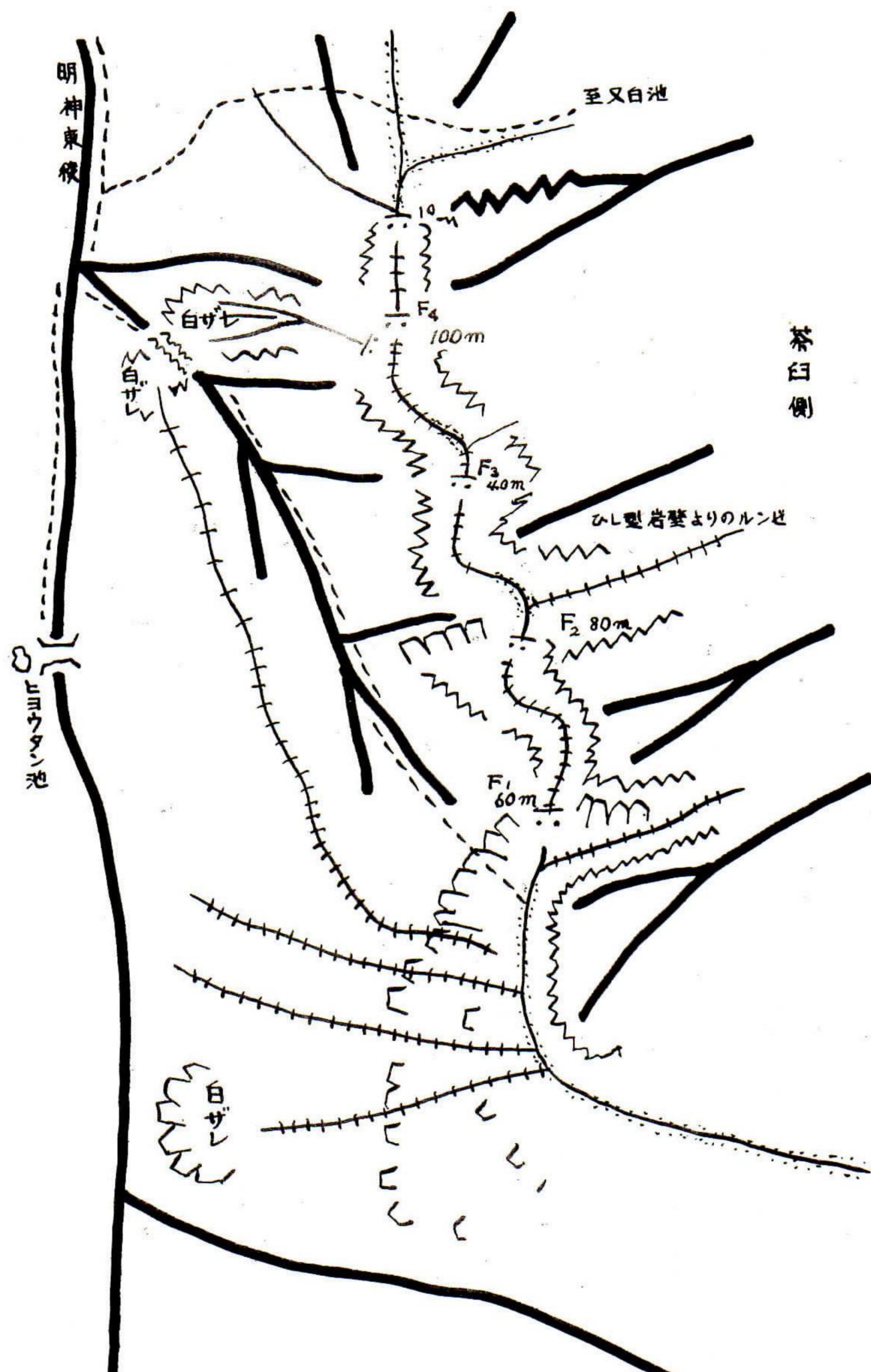
が、スラブ帯の右側に垂直のリッジがある。そこまでゆけば、上は抜けられるのではないか、こう云う様な事になり、トップは、ガリーから4米程右へ、スラブ帯の上端に出て、ザイルトラヴァース用に、アイスピングを打ち込む。

ザイルトラヴァース15m程で、垂直のリッジの基部の草付きレッジに出たが、そこからリッジを廻り込んで裏側の草付ガリーに入る事は困難であるので、5m程スラブを登ってカン木テラスに立つ。そこから真横に、モロくなつた岩角をたよりに、リッジを廻り込んで、ガリーに入り、灌木にてビレーをする。

灌木帯を40m、3ピッチでヒョウタン池より派出する稜の上へ出た。

F1以上の下又は、まだ誰にも知られていないと見聞した。谷はF1の上で左に折れ、右から落差80mのハングしたチムニ-滝が落ちている。その両岸は、鋭く切れ、美しいスラブのゴルジュとなって

いる。F1からF2の間に小滝の有無は、雪渓がピッシリと残っているので判明しない。F1の上に茶臼より落ち込む、高差600m程のスラブ状ルンゼがあり、その左奥には、上から下まで全てハン



下又白谷下部ゴルジュ帯概念図  
(山田作図)

ゲ状の岩壁が見える。あたりの状況から、10年前、この谷を下降した記録があるが、ルートはかなり茶臼よりの谷より離れた所ではないかと思われ、今までF2が全貌を現わさなかつたのは察しがつく。

時間的にはまだ早いので、F2以奥を偵察する為に、40m5ピッチ登る。急な灌木帯がやや開けた所から見る谷には、滝が3つ程有る。どれもが美しい滝であった。美しいゴルジュの中のF3は、落ちる水を滝壺ではね上げて虹を作っている。F4は、奥日光、湯本付近にある滝頭の滝を垂直に立てた様にいくえにも流れる美しい滝である。観賞するには良いが、いざ登るとなると、どれも登れそうもなく見える。

高度から察すると、あと少しでヒョーラン池に抜けられそうなので、下降の予定を中止して、そのままコンティニュアスで進む。登りながら、今しがたシャッターをパチパチ切ってはいたが、はたして蛇腹の時代物の写真機で、貴重な写真がとれているか心配になって来た。そしてこれからは、もっと安心出来るカメラを持って来ようと思った。

白ガレの細いリッジを渡って、お花畠を越えると、足下にセピアに染った池が見えはじめて来た。今日の事を誇らしく想いながらの下りは、色々な想いを派出させてくれた。

8月9日

昨日、はからずも上に抜けてしまったので、デポ品や、Fixをはずさなければならぬので出発を早める。今日はもう下山しなければならないから……。

Fixをはずした後、まる1日、雪渓の中に埋めてあった缶ビールのうまかった事。ふりかえりつつ、想いを新たに雪の上をすべりはじめた。

徳沢へかえると、昼食の用意が出来ており、パッキングをしながら手早くすませ、明日よりはじまるスバリ岳合宿に参加する為、混雑する上高地へと向う。

(檜山季樹 記)

ア イ ガ 一 だ よ り  
— ミッテルレギ山稜 —

秋 山 正 人

アルピグレンの牧草地に張られた我々のテントを包む雰囲気は素晴らしいものだ。あたり一面の牧草に混じって高山植物が色とりどりに咲き乱れているし、アイガ-北壁を落ちる雪崩の轟音や落石の或いは鈍く或いは鋭い音の切れ間には、カウベルのゴロンゴロンと云う牧歌的な響きが聞えてくる。何よりも乳色の霧がアルプにただよう時、谷間から流れてくるアルペンホルンの旋律はベルナ-オ-バランドの旋律そのものだ。

この素晴らしいキャンプサイトで我々は北壁の上部についている見ただけでも不安定な雪がもつと落着いてくれると、長い好天を待っていた。そしてその好天の初期にどうしても片付けて置かねばならない山行にアイガ-のウエスト・フランケの偵察があった。ウエスト・フランケはアイガ-北